

番組タイトルで、仕掛ける。

～「スイエンサー」から「孤独のアンサンブル」まで～

TV Program Titles As Shikake

- Expressions Such As “Suiensaa”, ”An Ensemble For Isolated Players”

村松秀¹

Shu Muramatsu¹

¹ 近畿大学総合社会学部

¹ Faculty of Applied Sociology, Kindai University

Abstract: テレビ番組の「タイトル」は、視聴者の関心を引き、番組へといざない、チャンネルを合わせてもらうために必須のものであり、制作者は創意工夫の限りを尽くす。本稿では、番組タイトルについて仕掛学の観点から整理し捉え直すことを試みた。タイトルの視聴者への提示は目的の二重性など仕掛けの3要件を満たすと考えられ、その効果は即効性というよりは遅効性の特徴が強く、また仕掛けの対象は視聴者のみならず制作スタッフや出演者にまで及ぶものである。

1 はじめに

<キワミコトノハ得心寺！>

こんな文字列をテレビの番組表に見つけたら、皆さんはいったい何を想像するだろうか。不思議なカタカナの羅列、そして「得心」と「寺」が並んだ違和感の塊のような感じは何だ。番組の中身が妙に気になるのは、おそらくこのタイトルの引力によるものだろう。

では、

<日本エコー遺産紀行>

こちらの番組タイトルはどうだろうか。「エコー遺産」ってなんだ？頭の中に「？」を浮かべつつも、大いに気になるに違いない。

テレビ番組は、オンエアの時間まで、あるいはネット配信の動画としてクリックするまで、視聴者は中身を見ることはできない、という特性を持つ。本当に面白いかどうかわからないにもかかわらず、視聴者は番組をわざわざ見てくれる大変有難い存在なのである。では視聴者はなにをきっかけにして番組を視聴してくれるのか？そこできわめて大きな役割を果たしているのが、「番組タイトル」である。番組

のプロデューサーやディレクターは、多くの人にとって気になるような珠玉のタイトルをひねり出そうと日夜必死である。なぜなら、番組の視聴にダイレクトに寄与するからである。

筆者はNHKの番組ディレクター・プロデューサーとして32年のキャリアを積んできた。番組作りは、視聴者と「見えないコミュニケーション」をすることによっていかに相手の心を動かし、番組のメッセージを届け切るか、ということに尽きる。このことを本稿では「仕掛学」の観点から整理し直し、特に視聴者の心をつかみ動かしていく上できわめて重要な「番組タイトル」に着目し、その仕掛けの意味合いと効果について論考してみたい。

2 仕掛学から見た「番組タイトル」

松村によれば、「仕掛け」とは「公平性」「誘引性」「目的の二重性」の3つの要件（FAD要件）をすべて満たしたものであり、それによって行動変容を促すものである[1]。これら3要件を今回、テレビ番組タイトルの提示に当てはめて考えてみる。

まず、筆者が長年関わってきたNHKでは、番組制作の根幹として、その番組が果たして本当に公共のためになっているかどうかを常に問い続けることで、公共性を担保してきた。したがって番組タイトルに「公平性」はそもそも備わっていないといけないはずのものである。

*連絡先：近畿大学 総合社会学部 社会・マスメディア系専攻
〒577-0818 大阪府東大阪市小若江3-4-1
E-mail: muramatsu_shu@socio.kindai.ac.jp

次に、番組のタイトルが多くの人々にとって気になる、つついチャンネルをつけてしまいたくなる、というのは「誘引性」そのものに他ならない。

そして、視聴者が仕掛けられる側だとすれば、視聴者にとっての目的「気になるのでつついチャンネルを合わせる」は、実は仕掛けた側、つまり番組制作者の目的とは異なる。制作側はただチャンネルを合わせてもらえれば良い、というわけではない。番組を視聴し続けてもらい、それによって「番組が訴えたいメッセージが視聴者に伝わる」というのが真の目的なのである。つまり番組タイトルには「目的の二重性」が包含されている。これらのことから、番組タイトルの提示は「仕掛け」の3要件を満たすものであるだろう。

なお、番組タイトルが仕掛けようとしている対象が視聴者だけではないことには、ひととき留意が必要である。このことはのちに触れることにする。

3 番組タイトルのカテゴリー分け

視聴者にとって気になる、つついチャンネルを合わせたくなる、その目的をかなえるために、番組のタイトルには工夫が凝らされている。拙作の番組のタイトルをもとに、それらをカテゴリー分けすると、以下のようになる（表参照）。

① 「読んで字の如し」、だが、気になる

例えば、

<指揮者なしのオーケストラ、第9に挑む！>

（2022年放送）は、文字通り、指揮者のいないオーケストラが、あのベートーヴェンの合唱付きの大曲である「第9」にチャレンジしていくのをドキュメントした番組である[2]。第9をいったいどうやって指揮者なしで演奏するのか、それだけでワクワクしてくる。タイトルが端的に番組の魅力を伝えているので、読んで字のごとし、だがとても気になるタイトルとなっている。番組は、32台のカメラを駆使し、ふだん決して見ることのできない音楽が生み出されていくプロセスをあぶり出し、プロの音楽家のすさまじさ、そしてベートーヴェンの偉大さを伝えようとした。

② 「言葉の組み合わせ」を発明する

<99人のクイーン>（2021年放送）は、イギリスのロックバンド、クイーンの結成50年・ボーカルのフレディ・マーキュリー没後30年という節目の年

に企画した番組である。「99人」も「クイーン」もふつうの言葉のようで、それらが組み合わさった途端に「いったい『99人のクイーン』とはどういう意味なのか？」というのが急激に気になり始める。クイーンは4人組で99人ではないし、そもそもなぜ、切りのいい100人ではなく99人なのか、というのも妙である。

この番組は、放送時点の2021年だからこそ聴きたいクイーンの曲を、クイーンが大好きな方々99人に選んでいただき、MCの小林克也さんと杏さんによりランキング形式で紹介する、というものだった。世界を覆い尽くしたコロナウイルスは、フレディを死に至らしめたエイズウイルスを思い起こさせる。また時代的にLGBTが強く認識されるようになってきた2021年は、またクイーンの聴こえ方・捉え方が変わってきているに違いない。つまり「今に生きるクイーン」を示すことで、私たちが「今に生きる意味」をともに考えていこう、というのが番組の目的であった。そして、99人に、あなたの1票を加えると、計100人のランキングになる、というのがミソだったのである。

表：番組タイトルのカテゴリー分け 事例

① 「読んで字の如し」、だが、気になる
指揮者なしのオーケストラ、第9に挑む！
② 「言葉の組み合わせ」を発明する
99人のクイーン オーケストラ・孤独のアンサンブル
③ 「言葉そのもの」を発明する
キワミコトノハ得心寺！ 日本エコー遺産紀行 ゴスペラーズの響歌 生殖異変 ～しのびよる環境ホルモン汚染～
④ 「意味不明」、だからこそ惹かれる
すイエんサー

また<オーケストラ・孤独のアンサンブル>（2020年放送）[3]も、言葉の組み合わせの発明によって、極めて強い誘引力を持った番組タイトルである。なぜなら、「孤独」と「アンサンブル」は矛盾しているからである。なぜこの二つが組み合わさったタイトルなのか？いったいどんな番組が展開するのか？視聴者の気持ちをぐっと惹きつけ、実際の視聴に繋げていった。

コロナ禍で最初の緊急事態宣言が出た2020年4

月、筆者は前述の「指揮者なしのオーケストラ」の取材・制作をしていた。緊急事態宣言によって、全国のオーケストラはあらゆる公演が中止に追い込まれたばかりか、練習で集うことも叶わず、メンバーたちは自宅の防音室でたった一人音を鳴らすしかなかった。その状況を知ったとき、思いついたのが「孤独のアンサンブル」という言葉の組み合わせだった。

番組では、オーケストラのトッププレイヤー7名に、自宅で一人だけで演奏する「孤独の音楽」を奏でていただいた。インタビューと合わせ、収録はすべてリモートで行う。その孤独の音楽を、7人分数珠繋ぎにし、合間には無人となった東京の夜景を挟み込んだ。

わずか3週間強で作りに上げた番組「孤独のアンサンブル」は、特にネット上で話題となった。当時の日本人がみな感じていた孤独は、一人だけではないのだ、「孤独だけれどひとりぼっちじゃない」のだ、ということが音楽を通じて伝わり、それが癒しや人とのつながりをもたらすこととなった。



写真1:「オーケストラ・孤独のアンサンブル」(2020)では、無人の高速道路の風景にタイトルを重ねた

③ 「言葉そのもの」を発明する

冒頭に紹介した<キワミコトノハ得心寺!>(2015年放送)は、言葉自体を発明することで番組タイトルの誘引力を生み出した事例の一つである。

NHKでの主軸の仕事が科学番組の制作だった筆者は、科学技術研究の世界で使用される専門用語を取り上げる番組を制作したいと思いついた。しかし、サイエンス系の専門用語を知りたいと思う視聴者の数は多くない。一般の人たちに広く見てもらうために発明した言葉が「キワミコトノハ」だった。これは「専門用語」を古の日本語のようにいわば翻訳したような言葉である。



写真2:「キワミコトノハ得心寺!」当時のHP(NHK Web)

さらに、このキワミコトノハは難解だが人々の役に立つものでもあるだろう。であれば、「知る」「学ぶ」というレベルではなく「得心」するところまで至りたい。それは修業のようなものでもあるから、舞台は「寺」であるべきだろう、ということででき番組タイトルが「キワミコトノハ得心寺!」だったのである。

番組では一般的にはきわめて認知度の低い専門用語「ベクシオン」「マッデン・ジュリアン振動」「メラノソーム」などの奥深い世界へとといざない、視聴者の飽くなき知的好奇心を刺激する番組となった。ちなみに収録場所は実際のお寺をお借りし境内で撮影した。

<日本エコー遺産紀行 ゴスペラーズの響歌>

(2021年~)は、タイトルに含まれる「エコー遺産」が新たな言葉の発明である。

トンネルや銭湯、吹き抜けなど、音の響きが豊かだったりユニークだったりする場所がある。こうした場所を番組で「エコー遺産」と名付け、掘り起こし、そこをゴスペラーズが訪ねていき、アカペラで歌唱しその場の響きを堪能する、という番組である[4]。マニアックだがそれゆえに放送のたびに話題にさせていただき、特に何のPRもしていないのに「エコー遺産」がトレンドで33位まで上がったこともある。初回以降、横浜編、京都編、広島編とすでに4本が制作されシリーズ化されている。

単に響きがユニークなところを紹介する、ということだけでは番組が表面的にならざるを得ず、企画も採択されなかったであろう。「エコー遺産」という独特な言葉が発明したことによって、ただ響きが面白いということを超え、エコーというある種のツールで街を見つめ直すことで、その街がまったく違って感じられてくる、という発見が生じた。そうして、街々の新たな観光資源の発掘、文化価値の創造につながっていった。いま筆者が運営する大学のゼミではエコー遺産探しを具体的に進めようとしているところである。

「刺さる言葉」を発明できると、それが社会に広がり、結果として取り上げた世界の価値や問題性などが浸透していくことにつながる。筆者はかつて、専門家たちと一緒に「環境ホルモン」という科学的な専門用語を「発明」し、NHK スペシャル<生殖異変 ~しのびよる環境ホルモン汚染>（1997年放送）など十数本の番組を展開、まるでホルモンのように働くことで生殖などの異変を引き起こす可能性のある合成化学物質という新しいタイプの環境汚染問題を提示した[5]。その結果、哺乳瓶や食品用手袋など様々なところで環境ホルモンを使用しないように改善がなされ、社会は環境ホルモン暴露を減らす方向へと大きく舵を切った。問題の深刻さを広く社会に知らしめるのに、環境ホルモンという言葉の発明は大きく寄与したと言えるだろう。

④ 「意味不明」、だからこそ惹かれる

筆者が企画立ち上げの2008年から足掛け7年にわたりプロデューサーとして制作を担当してきたEテレの科学(?)エンタメ番組<すイエんサー>[6]は、2023年春まで続いた大長寿番組となった。「すイエんサー」というタイトルがまったく意味不明であるがゆえに、視聴者の気になる度合いがむしろ強まったことが、レギュラー番組としての定着を強く後押ししたと思われる。



写真3：2014年当時の番組HP（NHK Web）

「すイエんサー」という言葉は当時のスタッフ間のブレストの中で生まれ決まったものだが、その後、番組名の意味を公式に語ったことは一度もない。そもそも「すイエんサー」という名前なのに、放送日はなぜか水曜日ではなく当時は火曜日であった。そればかりか、番組の初期には、初代MCの一人、タレントの大島麻衣さんが、毎回番組の冒頭で「すイエんサー」の意味をテキトーに語る、というのがお決まりになっていて、「沖縄の方言」であるとか、「卓

球の雄たけび」であるとか、「エイエイオーの進化系」であるとか、さまざまな説を番組側から提示していく、意味不明な空気をさらに煽っていった。タイトルの意味を知りたい、と思う視聴者の気持ちが目的となって、番組の視聴につながったことが、Eテレの人気長寿番組へと成長した大きな要因になったといっても過言ではないだろう。

4 視聴者への仕掛けの目的

ここまで語ってきたことでわかるとおり、番組タイトルを見た時の視聴者の目的、すなわち、タイトルが気になるので早く番組を見てみたい、という思いと、制作者の目的は明らかに違っている。

例えば「指揮者なしのオーケストラ」では、音楽が紡ぎ出されていくプロセスのすごさが伝わってほしい、という目的だったし、「99人のクイーン」では、今だからこそ新たな価値を放つクイーンの楽曲を通じ、私たちが今を生きる意味を捉え直してほしい、という目的であった。

このように、実は番組には、その「芯」とも言うべききわめて強い「ねらい」が設定されているものである。そして、そのねらい・目的は公共性に裏付けされた、公共の電波を使っての放送に値する高い志のあるものでなくてはならない。しかし、そうした「ねらい」をタイトルや番組冒頭でいきなり語ったとしても、難しすぎたり高尚すぎたりして視聴者がついてこれなくなるのは当然である。番組の「芯」は、番組をフルに見てもらったときにこそ浮かび上がってくるものであり、そうして視聴者に捉えてもらえるはずである。だからこそ、番組タイトルは鮮烈でよりキャッチーなものである必要がある。タイトルを見た視聴者が、気になる、知りたい、と思ってチャンネルを合わせてくれれば、そのままテレビを消したりチャンネルを変えたりしないよう、さらに視聴者と「見えないコミュニケーション」を続けていくことで、ようやく「芯」にたどり着いてもらうことができる。つまり、ある程度の時間がかかるのである。

通常の仕掛けであれば、例えば「ライオン型手指消毒器」[1]のように、口に手を入れたくなる気持ちを利用して、自動の手指消毒器を作動させる、というように、二重性の目的は「即効性」があるものが大半である。だが、番組タイトルでの仕掛けの場合は、制作者側の目的に到達するには少なくとも放送時間分の長さがかかり、こうした「遅効性」が特徴ともいえる。

特に遅効性が強いと思われるのが「すイエんサー」

であろう。この番組は、「スパゲッティのソースの飛びはねをなくしたい」「線香花火を長持ちさせたい」「バースデーケーキのろうそくの火を一息だけで消したい」といった日常生活の中の素朴なギモンに、中高生でファッションモデルを務めるすイエんサーガールズたちが挑戦するのだが、彼女たちは「打ち合わせなし・台本なし」の完全ガチンコでチャレンジしていくのが特徴である。ロケ現場でも、考えるための大括りな場の設定と手がかりは与えられるものの、あとは何のヒントもなく、彼女たちはひたすら自分たちの力だけで考え、解こうと挑む。紆余曲折は当たり前、思考の絶対量をとことん増やしていく営みを、私たちは「グルグル思考」と呼び、どんな設定によってグルグル思考をリッチにできるか、日夜腐心していた。番組は、すイエんサーガールズがグルグル思考をとことん続けていくプロセスを描いていく。そしてこれを視聴者に追体験させることで、無駄のようでも真実をひたすら追い求めるプロセスこそがサイエンスすることそのものであることを感じてもらうのが番組の目的である[7]。

実は、「すイエんサー」という番組タイトルがどうにも意味不明であるのは、まさにタイトルからして「グルグル思考」をしてもらうがためなのである。番組でもタイトルの意味をわざわざ攪乱していたのもそれゆえである。視聴者は、意味不明なタイトルの意味が気になり、考え、チャンネルを合わせ、番組を見て、さらにわからなくなり、再びタイトルの意味を考えていく。つまり、タイトル自体が番組の芯である「グルグル思考」そのものを体現している、というわけである。タイトルについてとことん考え、番組の各回のテーマをとことん考え、グルグル思考をきわめようとしていく視聴者には、番組タイトルの遅効性がとことん発揮されるのである。

5 タイトルによる出演者・制作スタッフへの仕掛け

ところで、番組タイトルは視聴者に向けてだけのものではない。実は、番組出演者への仕掛け、そして、番組制作スタッフへの仕掛け、というものもあることを述べておきたい。

まず制作スタッフである。レギュラー番組ともなると数十人から100人以上の単位でスタッフがかかわることになる。通常であれば、スタッフの仕事の目的は、カメラマンであれば撮影、編集マンであれば編集、というようにスキルによって定まってくる。ところが、良いタイトルが定まっていると、スタッフの目的は自身のスキルを体現することではなく、

「番組タイトルの世界観の具現化」になってくるのである。つまり、スキルの体現は目的ではなく、タイトルの世界を具現化する目的のための道具がスキルということになる。

良いタイトルとは、タイトルが決まった瞬間に番組自体が浮かび上がってくるものである。タイトルそのものが番組のイメージを象徴し、制作スタッフたちにとっては目指すべき姿が見えやすくなり、チームとしてタイトルの具現化を目指す求心力が高まる。

「すイエんサー」はまさにそうであった。この番組のタイトルが決まると、不思議とコンセプトや演出がどんどん浮上してきて、グルグル思考を深めていこうという番組の方向性や形がどんどんと定まってきたのである。番組タイトルが制作スタッフへの仕掛けとなっている好例である。

「孤独のアンサンブル」も同様に、タイトルによって番組の姿かたちが浮かび上がってきて、制作スタッフに対しタイトルの世界を具現化させる効果があった。

そればかりか、孤独の中で演奏してくれたオーケストラのトッププレイヤー達への仕掛けにもなっていたことが、特筆すべき点として挙げられる。

「孤独のアンサンブル」は、視聴者に癒しや人とのつながりをもたらしたのと同様、演奏してくれた音楽家たちにも癒し、そしてつながりを与えていたのである。そして、「孤独の音楽」を奏でたプレイヤー達は「ぜひみなでアンサンブルをしたい」という思いを募らせていったのである。

そして、「孤独のアンサンブル」から3カ月後、我々の呼びかけに応じ、今度は続編も含めたトッププレイヤー達13名によるリアルなアンサンブルが実現、「明日へのアンサンブル」と題したこの番組は、またも話題となった。

このアンサンブルは「孤独の音楽」を奏でたメンバーのみで構成されるため、コントラバスもヴィオラもない変則編成なのだが、そのいびつさや、また2mものソーシャルディスタンスを保って演奏しなくてはならないこと、無人でのコンサートであることなども含め、それら自体がコロナ禍でしか生まれない音楽なのではないか、と奏者の皆様も考え、ぜひやりたい、とってくれたことで実現したのである。これら「孤独」3部作はその後、合計で約20回も再放送がなされるほどの注目を集めることとなった。

さらには「明日へのアンサンブル」から2年余り経った2022年12月、NHKホールでの、有観客でのリアルコンサートが実現した。「共生へのアンサンブル

ル」と題したこのコンサートは、出演者である奏者たちが、「いつか観客のいる前で、このアンサンブルでのコンサートを実現させたい」という思いを共有してくれたおかげで、現実のものとなったのである。

コロナ禍の先を目指し前へと進もうという演出意図のもと、アンサンブルは素晴らしい演奏を次々と披露し、コンサートは大いに話題となった。

「孤独のアンサンブル」というタイトルは、孤独の音楽を通じて人々に癒しとつながりをもたらすことが制作側の当初の目的だったのに対し、出演者側は、孤独でなく集うこと、そして有観客でのリアルなコンサートを開くことへと目的を見出していったのである。

これらのことは、番組タイトルは視聴者への仕掛けのためだけに存在しているのではなく、制作スタッフや、さらには出演者にも仕掛けをもたらしていることを示している、とも考えられるであろう。そしてその多くは即効性のものではないが、ともすると数年がかりであっても、遅効性として大きな効果をもたらしてくれる可能性も十分あるであろう。



写真4：「共生へのアンサンブル」終演後、笑顔がほころぶ各オケのトッププレイヤーたち
(2022年12月、筆者撮影)

6 おわりに

拙稿では、テレビ番組におけるタイトルについて、仕掛学の観点から整理し直すことを試みた。

番組タイトルは視聴者に対して、気になる、ちょっと見てみたい、という思いを生じさせ、チャンネルを合わせさせるように心を動かしていく、ある種の装置のようなものである。しかも通常の仕掛けと異なり、遅効性の傾向が強いと思われる。また、仕掛の範疇が視聴者のみならず、制作スタッフや出演者まで及ぶところも特徴的である。

ただし、本稿はまだ観念的な分析に過ぎないので、より深く論じるためには今後、実測的な効果測定も必要であろう。

今回は番組タイトルに着目したが、「番組を見続けてもらう」という目的に照らし合わせると、タイトルは番組の世界へ飛び込んでもらうという意味ではとても大切な存在である一方で、番組を視聴する入口のところへいざなうに過ぎない、という見方もできる。

さらに、番組の世界の入口へといざなうことができたとしても、そこから先は視聴者とずっと「見えないコミュニケーション」を計りながら、番組を見続けてもらわなくてはならない。そこで必要なのがやはり「仕掛け」である。

実のところ、番組というのはずっと「仕掛け」が連続していくものであるというのが筆者の実感である。「なんだこれ？気になる」という仕掛けを、秒単位でひたすら連続させていくことで、視聴者が映像コンテンツから離れることをできるだけ防ぎ、または気をそらした人を画面に戻そうとしていると捉えることができるだろう。それはまた別の機会に論じてみたい。

筆者は現在、近畿大学・マスメディア系専攻の教員であるが、ここでは番組のプロデュースの枠を超えて、人々の心を動かし豊かにする「コトづくり」のプロデュースをしていこうと、ゼミ生と試行錯誤を続けている。人の心を動かす、という点で、仕掛学と大いに共有できるところがあると考えており、引き続き様々なことを学び吸収していきたい。

謝辞

こうした発表の機会をくださった仕掛学研究会の松村真宏氏、またすべての番組出演者・関係者の皆様に心より感謝申し上げたい。

参考文献

- [1] 松村真宏：仕掛学，東洋経済新報社（2016）
- [2] 指揮者なしのオーケストラ 第9に挑む！，
<https://www.nhk.jp/p/ts/YX67JVKZ7G/> NHK Web
- [3] 村松秀：孤独のアンサンブルーコロナ禍に「音楽の力」を信じるー，中央公論新社（2021）
- [4] 日本エコー遺産紀行 ゴスペラーズの響歌，
<https://www.nhk.jp/p/ts/GXZLNZR868/> NHK Web
- [5] 村松秀：生殖に何が起きているかー環境ホルモン汚染，日本放送出版協会（1998）
- [6] すいえんサー，
<https://www.nhk.jp/p/suiensaa/ts/K8Q468L9RR/>
NHK Web
- [7] 村松秀：女子高生アイドルは、なぜ東大生に知力で勝てたのか？，講談社（2016）